

シーボルトの長男アレクサンダーが  
玉井喜作に出会った話  
奥 正敬

■はじめに

江戸時代後期に長崎のオランダ商館で医師を務めたフランツ・フォン・シーボルトの長男アレクサンダー（1846-1911）は、高名な父の陰に隠れてしまって知名度の低い人物です。しかし、彼は江戸時代末期に日本を訪れ、明治時代中期にかけて日本とヨーロッパの国々との交渉で重要な役割を果たしました。日本を去り母国ドイツで暮らし始めてからも、一人の日本人と出会うことで、日独友好のための大きな仕事をするようになります。

■シーボルト父子の来日

アレクサンダー・シーボルトは1846（弘化三）年に父が働いていた国、オランダのライデン郊外で生まれています。それも父の名を冠した「シーボルト植物園」内の「日本」と名付けられた別荘であったといわれます。1859（安政六）年、就学途中の13歳で父に伴われて日本へ向かいました。

ドイツ人である父のフランツ・フォン・シーボルト（1796-1866）は嘗て長崎にオランダ商館医として滞在し、同地の鳴滝に塾を開いて日本の蘭学医の水準を向上させました。また、博物学や民俗学の研究も進めていましたが、帰国の折りに徳川幕府によって禁制品とされていた日本地図などを持ち出そうとした、所謂シーボルト事件によって国外追放になりました。しかし、1858（安政五）年の日蘭通商条約の締結で追放令が解かれ、植物調査を目的とした再来日が叶ったのです。滞日中、請われて幕府の外交顧問に就きますが、多くの日本人処分者を出していた過去の事件の影響もあり、これを辞し、1862（文久二）年にアレクサンダーを残してヨーロッパに戻りました。そして、1866（慶応二）年にミュンヘンで逝去しました。

■アレクサンダーの功績

来日時に13歳であったアレクサンダーは、来日して3年目の1861（文久元）年にはイギリス公使館に勤務し、生麦事件など日英関係の折衝に通訳として加わっています。また、1867（慶応三）年には同公使館勤務のまま、パリ万博へ

の徳川武昭の遣欧使節にも同行し、大政奉還を経た1869（明治二）年に、後に知日家に成長する弟ハインリッヒ<sup>(1)</sup>を伴って日本へ戻りました。帰国後、明治政府とオーストリア・ハンガリー二重帝国との日奥通商条約の締結に貢献した後に、イギリス公使館を退職して日本政府に雇われます。その後は、勲章制度の導入や大蔵省での印刷局の設置に関わり、この間、ウィーン万博へ出張もしています。また、1878（明治十一）年に外務省へ移ると在ベルリン公使館勤務、さらには外務卿井上馨のもとで不平等条約改正に取り組み、その後もローマ公使館で勤務するなど、幕末から明治にかけての日本の外交に大きな貢献をしていました。

こうしたアレクサンダーも40歳を過ぎた1887（明治二十）年にヨーロッパへ戻り、結婚後の1889（明治二十二年）年からはベルリンに定住します。この頃は父の遺稿の整理や日本に関する論文を執筆する日々であったようですが、1894（明治二十七年）年以降に一人の日本人青年と出会いました。

■玉井喜作との出会い

その青年は玉井喜作（1866-1906）といい、1866（慶応二）年に周防（現在の山口県）の造り酒屋に生まれていました。東京の独逸学校でドイツ語を身に付け、東京大学予備門の退学後のドイツ語私塾経営を経て札幌農学校の教員になりますが、ドイツへ行く夢を捨てきれず、1892（明治二十五年）年にウラジオストックから厳寒のシベリアを横断してドイツへ到着しました。ベルリンでは大学で法律を学びながら、新聞記者として記事を書き、さらに、地理学の雑誌に日本関係の記事を寄稿していました。しかし、玉井はこれに満足せず、自分で雑誌を刊行することを考えるようになります。そして、1898（明治三十一年）年に、シベリア横断体験をもとに、雑誌創刊の資金源となる“Karawanen-Reise in Sibirien.”（『西比利亞征榎紀行』）を刊行して好評を得ています。

現在の研究者にも玉井とアレクサンダーの出会いの詳細は分からないようですが、玉井はアレクサンダーがベルリンに居を構えた7年後の1894（明治二十七年）年に同地に到着しています。アレクサンダーは1846年生まれ、玉井は1866年生まれなので二人の年齢は20年（歳）の差がありました。

玉井がベルリンに入った1894（明治二十七年）